

新たな始まり

Vol.39

親鸞聖人750回大遠忌

宗門長期振興計画の現状

重要文化財 本願寺蔵『顕浄土真実教行証文類』の復刻について

宗門長期振興計画の重点項目⑤「時代に即応する教学の振興」のうち、教学伝道研究センターでは、このたびの親鸞聖人七百五十回大遠忌法要を機縁として、鎌倉時代から今日まで七百年以上もの永きにわたり本願寺に相伝され尊ばれてきました、重要文化財「顕浄土真実教行証文類」を復刻することとなりました。

1 顕浄土真実教行証文類

(教行信証)について

『顕浄土真実教行証文類』(以下「教行信証」)は、親鸞聖人の畢生の大著であり、浄土真宗の教えの綱格を体系的に明らかにされた立教開宗の根本聖典です。『本典』『教行信証』『教行証文類』『広文類』などと略称されていて、浄土三部経や七高僧の論釈を始めとして広く経論釈の要文を集めて、親鸞聖人の

御自釈を施した文類の形式をとつてい
ます。教文類・行文類・信文類・証文類・真仏土文類・化身土文類の六巻からなり、初めに総序をおき、信文類に別序、化身土文類の末尾に後序があります。その内容は、浄土真宗の法義である本願力回向を往相・還相という二種の回向をもつて示され、その往相を教・行・信・証の四法で明かされています。つまり衆生が浄土に往生していく因果(往相)も、浄土に往生した者がすべての衆生を救うために穢土に還り来ること(還相)

親鸞聖人750回大遠忌 宗門長期振興計画

【基本的な考え方（コンセプト）】

- 『新たな始まり』
～明日の宗門の基盤作り～

【目標】

- 親鸞聖人750回大遠忌法要の修行
- 現代社会に因應する教学・伝道態勢の構築とみ教えに生きる「人」の育成

【重点項目】

- ①法要の修行
- ②記念行事等の推進
- ③協賛行事
- ④伝道態勢の整備
- ⑤時代に即応する教学の振興

- ⑥新たな門徒の誕生（教線の拡充）
- ⑦国際伝道の推進
- ⑧寺院の活性化対策
- ⑨過疎・過密対策
- ⑩地域社会との交流
- ⑪現代社会への貢献
- ⑫人材育成の新規対策
- ⑬既存の人材育成施策の強化
- ⑭宗務機能の点検と拡充
- ⑮境内地等の整備

も、すべて阿弥陀仏の本願力回向によるとされます。

『教行信証』が著されたのは、「化身土文類」に「三時の教を案ずれば、如来般涅槃の時代を勘ふるに、周の第五の主、穆王五十三年壬申に当れり。その壬申よりわが元仁元年「元仁とは後堀河院、諱茂仁の聖代なり」甲申に至るまで、二千一百七十三歳なり」（『註釈版聖典』四一七頁）とあることから、一般に親鸞

聖人五十二歳の元仁元年（一二三四）に撰述されたといわれています。この元仁元年をもって立教開宗の年とされているのは、こうした理由によります。

しかし、親鸞聖人の唯一の自筆本である真宗大谷派所蔵の『教行信証』（坂東本）などの綿密な研究により、さまざまな説が出されるようになりました。「坂東本」には、聖人の他の著述のように撰述年紀などの奥書がなく、何時書かれた

ものかはわかりません。本文も半葉八行や七行、九行書きで記されていますが、

全体の八割を占める八行書き本文の箇所は、文暦二年（一二三五）聖人六十三歳の時に書写された平仮名『唯信鈔』（高田派専修寺蔵）と同じときの筆と考えられます。また七行本文の筆致は、康元年（一二五六）前後の八十四、五歳のときに書き改められたものです。しかも八行書きの部分の書き直しがあまりないこ

とから、初稿本ではなく転写本であることがわかっていきます。

このほか寛元五年（一二四七）には、伯父の範綱の息である尊阿（信綱）が『教行信証』を書写していますので、このころには一応の完成をみたと推察することができます。これらことから、聖人が京都に帰られてから後に書かれたとする帰洛後撰述説や信巻別選説、元仁元年は法然聖人の十三回忌に当たっていることや専修念仏停止につらなる延暦寺奏状が出されていることを考慮して、元仁元年起筆説などが出されていますが、いまだ決定的な説をみるには至っていません。

3 西本願寺本とは

この『教行信証』には、鎌倉時代に撰述、書写された本として、本派本願寺に所蔵される西本願寺本、上記の聖人自筆本である真宗大谷派所蔵の「坂東本」、高田派専修寺所蔵の真仏上人書写本

（高田本）があり、鎌倉三本として重要視されています。

このうち真宗大谷派に所蔵のものは、親鸞聖人の真筆本で、関東の坂東報恩寺に伝来したことから「坂東本」とも称されています。

また、高田派専修寺に所蔵の高田本も宗祖の真筆といわれていましたが、その後、専信坊専海の筆であるといわれた時代がありました。しかし、今日では専海の書写本をさらに書写した真仏上人の筆であることが筆跡の研究から判明しています。

そして西本願寺本ですが、これも古来より宗祖の真筆と伝来してきたもので、坂東本が「草稿本」と称されるのに対して「清書本」と呼ばれるほどの整然とした体裁を持っています。奥書などから文永十二年（一二七五）の書写と考えられ、この年は親鸞聖人の十三回忌の翌年に当たることから、十三回忌を機に「坂東本」を編集しようという考えで書写されたものと窺えます。親鸞聖人が『教行信証』

を執筆されたと考えられる正像末の三時を勘案したところの元仁元年も、法然聖人の十三回忌に当たると軌を一にしています。この西本願寺本が歴史に登場するのは、応長元年（一二三二）覚如上人四十二歳のとき、越前の大町如道に『教行信証』を伝授されたときです。この覚如上人は、弘安十年（一二八七）に大綱の如信上人から真宗の要義を相伝されていますが、そこに「弘安十年春秋十八といふ十一月なかの九日の夜、東山の如信上人と申し賢哲にあひて釈迦・弥陀の教行を面受し、他力攝生の信証を口伝す」（「慕婦絵」）とありますので、如信上人からこの『教行信証』西本願寺本を相伝したとも受け取ることができようと思われます。また蓮如上人の文明六年（一四七四）の吉崎坊舎炎上のときに、本向坊了頭が「証文類」を火災から護ったとされる「腹籠りの聖教」としても知られ、西本願寺本の外題は蓮如上人の筆とされています。このように西本願寺本は法義が相伝されていく過程を探る



重文『顕浄土真実教行証文類』（本願寺蔵）

上で重要な意味を含んでおり、正応四年（一二九二）の『教行信証』開版の底本を探る上でも注目される本であります。

西本願寺本全体を見渡してみますと、「清書本」と呼ばれるに相応しく経論釈の引文や御自釈の箇所が改行が施されて

整然とした体裁を持つており、しかも内容を知悉した上での長行や偈文の区別となっていて、また分かりやすく改行が施されています。それにも増して重要なことは、真筆本の「坂東本」は冒頭部分である「総序」や「教文類」に大きな消失部分があり、同じく「真仏土文類」「化身土文類」にも欠落箇所があることで、これが西本願寺本ですべて確認できるといふことです。また現行の「正信偈」本文が確認できる鎌倉期の唯一の書写本でもあります。

4 復刻本の歴史

このような鎌倉三本ではありますが、そのうち坂東本は、大正・昭和・平成の各時代に複数の復刻本と廉価な写真版を刊行しています。また高田本についても、昭和の時代に復刻本と写真版との両本が多数発刊されており、その体裁や内容が広く世に知られています。

われてきた西本願寺本については、復刻本は大正十二年（一九二三）に一色刷（モノクロ）が刊行された後、昭和五十一年（一九七六）に三色刷が刊行されたのみとなっています。特に昭和の復刻本は、限定三百部とごく限られた部数であったことから、多くの方々が見ることもなく、今日に至っています。それに加えて写真版は一度も刊行されていません。ですから、いわば大正年間に刊行されて爾来、実に九十年近く経た今もなお、西本願寺本だけは拝読することが難しい状況にあるというのが現状です。

5 超高精細カラー印刷とは

そこで、このたびの親鸞聖人七百五十回大遠忌法要では、こうした思いを体して、大本に立ち返り、立教開宗の根本聖典である『教行信証』を中心とした研究事業を展開するなか、五十年に一度の親鸞聖人大遠忌を機縁として、重要文化財の西本願寺本を超高精細カラー印刷によ

り復刻することとなりました。

これまでの復刻本は、一色刷（モノクロ）のコロタイプ版に人為的に色指定をしてカラー印刷風に見せた二色刷、または三色刷でありました。コロタイプという技法は、平版印刷の一種で、写真印画と同様の効果が得られるきめの細かい印刷技術で、主として高級美術印刷などに用いられてきました。ですから、本物さながらのリアル感を醸し出すことができない優れた技術である反面、コストがかかることと一版から数百枚しか刷れないというデメリットがありました。また、コロタイプの二色（三色）印刷では、人為的な色指定ミスが起きたりと、必ずしも実物通りの色彩にならなかったことも否めないところではあります。

しかし、このたびの西本願寺本の復刻は、現在の最新技術による超高精細カラー印刷（六色）によって再現するものです。つまり、高画質フルカラー・デジタル写真撮影に基づく印刷となりますから、色調をはじめ原本の状態をそのまま

リアルに再現することが可能となります。

6 相伝されてきた貴重な書写本

こうして西本願寺本は、本願寺に相伝されてきた貴重な書写本であり、「教行信証」を知る上で極めて重要な位置づけであることがわかりますが、これを原本の状態で復刻するのですから、これは各寺院の寺宝とするに相応しいものといえます。法然聖人が示された選択本願の教えを、本願力回向の宗義として「教行信証」に余すところなく開顕されたその内容は、まさに私たちにとって根本聖典であるといえます。

もともと明治時代の中頃までは、本願寺で得度を受けるに際し、真宗の安心を間違えてはいけないということから第九代宗主本如上人の著された「御裁断御書」を授与することが恒例でしたが、それ以後は真宗の僧侶は「教行信証」を中心にした念仏生活を送るのが肝要だと

いうことで「御本典」を授与することになりました。この本願寺蔵版の「御本典」のもととなった本は西本願寺本ですから、この大遠忌を機縁として、精緻に書写された西本願寺本の復刻本を直接繙いてご覧いただき、その拝読を通して親鸞聖人の息吹を感じていただきたいと思います。

（教学伝道研究センター）